

## 經濟地理學上より觀たる戰後の世界(中)

文學士 寺田貞次

先年の世界戰爭は或る意味から申せば、獨逸の領土的野心、汎世界主義の結果でもありませんが又經濟的競争の結果とも觀られるのである。然し扱開戰となつて見ると、何分獨逸は學術技藝の進歩した國であるので、戰爭は單に兵力の強弱のみではないかない、武器の銳利なる、全く機械の戰爭であつた。此等は夫の毒瓦斯を始め、飛行機、潛航艇が如何に聯合國の軍隊を苦しめ、英人を恐れしめ、航海の不安を起したかに依て知る事が出来ます。從て戰爭の慘狀も未曾有で、此等は白耳義佛蘭西邊の戰跡を目撃した人の記事に依ても察する事が出来る。是やがて過去の世界の缺點を指摘し戰爭なるもの、如何に人類生活に有害であるかの教訓となつた。其結果は世界の思想上に一大變化を齎し、所謂世界改造の聲が高くなつて來た。殊に此等の慘狀は獨逸の軍國主義に依て引き起されたのであるから、此主義の絶對に誤りなる事を感じる様になり、人類生活の安全を計るには、軍國主義ではいかないと云ふので、此處に所謂民主主義デモクラシーが盛になつて來た。其意味は自由、平等、博愛等にあるが、要は之を主義として世界の平和を計らうと云ふのである。幸獨逸は衆寡敵せずの理に反せず降服をしたので、交戰國は國際聯盟なるものを組織し、世界の平和を永遠に維持する事にした其結果は民族自決と云ふ様な事をも認むる事になり、多年悲境に陥て居たポーランドは獨立し埃國

の一部に住て居たチエツク族も獨立してチエツコ・スロヅアキヤ國を建て、匈牙利國に屬して居たルーマニア人は母國に歸り、露西亞國にては北方のフィンランド人は獨立し、又白露西亞、小露西亞も獨立の意を有し、バルチック沿岸のエストニア人は獨立すると云ふ事になり小さい獨立國が多數に勃興した。又貿易にせよ今迄の保護主義ではないかない自由貿易主義にしなければいかないと云ひ今後の世界は從來の様な資本萬能主義ではいかない、今後の工業は人力に依るものである事の此戰爭で知られたので労働者を保護しなければならぬ、夫には各國の労働者に同等の待遇を與へねばならないと云ふので、労働會議を開くと云ふ風で凡てが民衆化せんとして居る。然し此國際聯盟なるものがどこ迄實現されるかは疑問で、必ずや矛盾も少からず起る事でありませうが、兎に角何等か標準理想がなければ平和を保つ事は困難であり

ますから、各國共に之を標準として、其理想、標準に近づく様につとめなければならぬのであります。

然れば此戰爭で列強は如何になつたか、一體經濟に關する考は、此戰爭に依て全く變化し、福田法學博士の言葉(大戰に於ける世界經濟狀態下卷)を借りて申せば、世界の經濟は、從來は生産本位で、生産流通而後に消費と云ふ順序であつたのが、戦後は全く反對に交戰國は皆消費を本位とする様になり、生産流通は之に順應して行かねばならぬと云ふ考になり交戰國の消費は非常に多くなり、歳出入の如き勿論異常の變調を生じ、交戰四ヶ年に於て各國共に多額の外債を背負ふ事となり(各交戰國負債額表)戰前の債權國は一朝にして債務國となつた。之に反し最都合よい位置に立つた國がある。之は北米合衆國と次は我國であつた。

北米合衆國は、其國土の廣大なる、生産物の豊

富なる、戦前より世界無比の幸福な國で、其中央部だけでも面積無量三百萬英哩で、二億の住民を養ふ事が出来ること云はれて居る、然るに現今の人口は尙一億に過ぎないし、土地は平坦肥沃と、北部には小麥の産夥く、其産額は優に國內の需要を充たすに足り、尙海外にも供給する事が出来、南部には棉花、甘藷等の産があり、棉花はテクサス・アラバマ邊の主産地で、世界棉花の大供給地をなして居る。農産許でなく、東部山脈中には前述の如く豊富な炭層があり、其豊富な事は英國以上で、石炭と共に鐵も各地に産出するので、各種工業發達し、ニュー・ヨーク附近は其中心としてピッツバーグの製鐵の如きは、獨逸のユツセンと並て有名であり、從て機械、造船業も發達した。此他織物製革等工業の進歩著しきものがある、夫で開戦後は中立國として、各種物資を歐諸國に供給した。交戦國の一に加てからも、其地的位置上、直接戦場

の慘を味ふ事もなく、從て大切な生靈を失ふ事は歐洲の様でないから、歐諸國の如く工場の運轉を休止しなければならぬと云ふこともなく、休止處でなく歐交戦國では、前述の通り、戦争は消費である要るだけのものは消費しても敵に勝たねばならぬと云ふ思想から、外債をやつて、必需品をぞん／＼買入た。其供給はと申せば、位置上から觀ても、工業發展の度から云ても、交通の點から推しても、合衆國以外に他にないのである。其結果合衆國の工場は休止處でなく、戦争の御蔭で普く發達し、合衆國は巨利を博した。所謂大成金となり、其富を貯ふる事無慮貳千八百億圓、外國貿易八拾五億餘圓、外資百貳拾億圓と稱せられ、外國にぞし／＼貸付其高は四拾億圓に上り、元利支拂差引一ケ年拾億乃至拾貳億圓の利を得る事になつたと稱せられる。只さへ富力な合衆國にして今回の巨大の富を重ねたのであるから、各種の方面に活

動を試みざるを得ない事になつた。餘り金があり過ぎるので之が消費の道を講じないと、反て社界の弊害を起すので、之が費途に苦心して居ると申しますのは事實で、合衆國では國內に於て新事業を起すのみならず、廣く世界に向て投資を企て、居る。國內の事業としては、其の化學工業品例へば染料の如き、戦前獨逸の供給を仰ひで居たのを戦後其輸入が杜絶した爲め、織物業に多大の打撃を受た結果は化學工業の奨励となり、從來不振であつた此種工業が發達し、或る程度迄獨品の輸入を待たなくてもよい事になつた。由來合衆國は工業は發達はして居たが、何分國土の大半は農牧産物が多かつた爲に、貿易は工業品よりも農牧品の方が重をなして居たが、戦争の結果合衆國は農業時代から一躍工業時代に進み、其結果は從來の獨逸品の販路を奪ふ事になつた。

一體戦前に於ける獨逸商品の跋扈は想像外で、

露西亞等は勿論、南米、中米と云はず、合衆國內に於ける獨逸品の勢力も、侮る可からざるものであつた。獨人は南米各市に商館を設け、銀行を置き、盛に貿易に従事し、人を各國に派して其人情風俗を調査し、其國に適合する商品を造り、又需要多き國の商品は之を模造して、之と競争した。例へば獨逸製玩具は戦前合衆國では大勢力を占めて居たものであるが、此等は日本玩具の模造品と我國品の販路を奪た形跡であると申します。こう云ふ風に、獨逸の商品は南米、中米を通じて大勢力を得て居た。合衆國は所謂汎亞米利加主義で、南米への發展を切望して居る折からだから、此期を逸せず早速獨品の販路を奪ひ、のみならず各種の方面に廣く投資すると云ふ有様になり、猶進んでは北米の北部アラスカより露領西比利亞方面迄も陰に畫策する處あり、東洋に於ては支那に向て陰然其勢力の扶植に努めると云ふ素晴らしい有様で

あります。斯くて北米合衆國は、歐諸國の疲弊に乗じ巨萬の富を得、國力頓に揚り、從來の位置を轉倒し、英國に代て世界の一大勢力となり、英・獨・佛等に代て盛に勢力の扶植を計る有様となつたのである。

合衆國に次で看過すべからざるは、日本であります。我國も交戰國の一ではありますが、地理的位置が北米同様、歐洲より隔て居るので、其影響を受くる事なく、合衆國と同様開戰の結果反て經濟上の發展を遂げ、開戰當初は一時本邦品に對する海外の需要が減じたので、憂慮の傾であつたが歐洲に於ける物資の缺乏は、やがて日本品の需要を喚起し、我經濟界は頓に活氣を呈し、物資缺乏の世界的影響は物價の暴騰を惹起し、國民生活上に困難を來したとは云へ、一般より觀れば、經濟的發展は未曾有で、工業用原料品は元來歐洲の産でなく、其植民地たる印度、濠洲、南洋等であつ

たので、歐洲工業の休止と共に、此等諸産地の原料品を優に得る事が出來た。尤船腹不足等の困難はあつたけれども、且支那と云ふ富源を近く控えて居るので、工業は著しく發達し貿易は輸入も増加したに拘はらず、輸出の増加甚しく、戰前常に輸入超過に苦み、一時は破産をさへ稱へられた我國が、俄に恢復、外債を消却するのみならず、幾分でも貸付をなす事になり、債務國たる日本は、一躍債權國と化した、恰も十九世紀歐洲騷亂當時に於ける英國と同境遇となつたのであります。

夫で戰時中は、何等の競争もなく、東亞、南洋方面に於て、英獨の商品に代りて販路を擴張した。此等は戰後我國の貿易額が、著しく増加して居るのを見ても知る事が出来る。(貿易年表)

然れば、戰後直に經濟活動を續け得る國は、北米合衆國と日本との二國である事と云はなければならぬ。然れば歐諸國の將來は如何、勿論歐諸國に

取ては、戰時中に負けた巨大の債務は之を返却しなければならぬから、今後は一層の活動を要するのではあるが、何分戰時中單に財政上に於て疲弊した許でなく、多くの活動盛りの青年を失ひ、或は各種の設備は破壊されたのだから、直に經濟活動を開始するわけには行かない。世界の經濟場裡に入る迄には却々の準備を要する事と思ふ。世論は其國內の秩序恢復には少くとも二三年を要すと云ふ事に一致して居るらしい。果して然れば現下の世界は殆ど戰時と同様北米、日本の兩國が經濟上に於ける二大勢力として活動する事になるのである。然し此二大勢力のいつ迄其勢を維持し得るやば素より問題である。

夫で戰後の勢力國として米・日を除き、他に經濟上好適の地位にある國はないかと考へまするに英・佛・伊・獨・露を除ては、他は皆此等諸國の屬國か植民地か又は小獨立國のみであり、近き將來に

於て世界の競爭場裡に打て出づべきものを認めない、將來を囑望すべきものは、矢張り英・佛・獨・伊等の他にないのであります。

然れば英・佛・伊・露・獨の將來如何、一體一國經濟發達上、現時勢として最重要なのは何であるか、前にも申した如く、世界戰爭は、全く腕力の戰爭でなくして機械の戰爭、工業の戰爭であつた。農牧本位の國柄では、到底此激烈な競爭場裡に於て其覇を握る事は不可能である。而して工業の基礎は現今の處、尙鐵・石炭を置いて他に無いのである。之は古來工業發達の歴史を觀、次に現今經濟上世界に覇を稱へて居る國を觀るとよく知れるのである。